

---

# バフォメット

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

バフォメット

### 【Nコード】

N1937E

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

テンブル騎士団の栄光と傲慢を嫉妬したフランス王は教皇庁を抱き込んで彼等を陥れる。だがその果てに王達を待ち受けていたものは。史実をもとにしたお話です。

## 第一章

### バフォメット

目的の為には手段を選ぶ必要はない。これは政治の世界においてはとりわけよく使われるし言われてきている言葉だ。それこそ昔から。

この時もそうだった。フランス王フィリップ四世。彼は今あることを考えていた。

「どうやっても無理か」

「はい」

家臣の一人が彼の言葉に頷いている。この時王は玉座に座りそこで考えごとをしていた。目鼻立ちは端整で口髭も奇麗に切り揃えてある。美男子といつてもいい外見だがその顔は非常に陰があり何処か陰惨な印象を強く与える。そんな顔をしていた。その王が玉座にいたのだ。

「既に教会からも金を取っていますが」

「そうだな」

教会への課税も導入したのだ。それまで完全な聖域であり手がつけられなかったがそれを強引に変えたのだ。その際教皇と対立もした。

「あの時もかなりてこずりましたが」

「うむ」

家臣の言葉に応えると共に頷いてみせた。

「教皇の反対で」

「黙らせてよかった」

「その通りです」

当然ながら教皇はその課税に反対であった。教会の利権が脅かされるからだ。しかし王はその教皇に対して実力行使に出たのだ。

まず三部会を開いた。僧侶に貴族、平民から成る議会だ。これの

狙いは王の国内での支持を確かなものにする為だ。まずはこれで王は自分が支持されているということを確認したものにした。それと共に国内の意見を統一させたのだ。王の深い読みがそこにはあったのだ。

こうして地盤を固めて。王は次の行動に出たのだ。

「あれは教皇も思いも寄らなかつたようです」

「馬鹿者めが」

こう言つてほくそ笑んでみせた。

「使えるものは何でも使う。そうだな」

「その通りです。武力でさえも」

「そうだ」

はつきりと告げた。

「むしろこうした時での武力ではないか」

「その通りです」

教皇がイタリアのアナーニという街にいる時に軍を送り彼を捕らえたのだ。俗に言うアナーニ事件である。これにより教皇は憤死し後の教皇はフランスの下に置かれることになった。

「それにだ」

「ええ」

さらに言葉を続けるのだった。

「あの教皇ではな」

「皆因果応報と言っています」

「その通りだ」

こう言つて陰惨な笑みを浮かべる王であつた。家臣もまた。

「何処の世界に神を信じない教皇がいる？」

「それこそ性質の悪い冗談です」

こう言い合うのだった。

「神を信じず贅沢と美女と美酒、美食に明け暮れ」

「祈りをしている者を罵つたとか」

「呆れた男だ」

こうまで言う。この捕らえられた教皇をボニファティウス八世という。

彼は他人を蹴落とし謀略を駆使して教皇にまでなった。非常に卑劣かつ貪欲な政治家であり己の欲望の為には手段を選ばない男だった。先の教皇を陰謀で退位させ監禁して教皇になったのだ。そうした男だった。

この教皇は神なぞ信じてはいなかった。聖職者なのにだ。神を祈る男にすぐに激怒してこう叫んだのだ。

「馬鹿者が！イエスは自分さえ救えなかった男だ。他人を救えることなぞできはしない！」

これが教皇の言葉だ。信じられないことに。こうした男であるからフランス王に捕らえられても誰も同情しなかったのだ。ただ悪事の報いを受けたただけだと皆思ったのだ。

「八十近くにもなつて酒と美女か」

「しかも美食まで」

「貪欲もそこまで行くと見事だ」

これは褒め言葉ではない。

「邪悪なものだ。報いを受けたただけだ」

「その通りです。それで」

「それで。どうした」

「確かに聖職者への課税は成功しました」

教皇を黙らせたことが決定打だった。だがそれで終わらなかつたのだ。

フランスの財政不足はそれで解決はしなかつた。王はそのことに頭を悩ませていた。その解決を目指していた。その為に手段を選ぶつもりはなかつた。

「ですが。まだ赤字は残っています」

「それをどうするかだが」

「王よ、お考えは」

「そうだな」

右手を己の口に当てる。そのうえで考える顔になるのだった。

「このままではどうしようもない」

「その通りです」

「ではどうするかだ。問題はそこだ」

そうなのだった。だが。

「しかし。どうしたものか」

「教会はもう使っていますし」

「教会はな。もう使えはしないか」

「他に税収はできる限り行っております」

それも既に行っていたのだ。各階層への租税を強化している。しかしそれでも赤字は解決していなかった。およそ不可能ではないかとさえ思えるものがそこにあった。

「ですが。それでも」

「他に金がある場所はないか」

「ある場所にはあるのですが」

ここで家臣は言う。

「ヴェネツィアやジェノバの商人達も」

「連中はまた別世界だ」

こう言って顔を顰めさせる。

「貿易を行っているからな。それへの収入が別格だ」

「胡椒にしる」

「羨ましい限りだ」

この時代、いやローマ時代から胡椒は貴重品だった。その貿易での収入は天文学的なものでありイタリアの諸都市を繁栄させる要因ともなっていたのだ。

「金のなる木がある者達は違う」

「そうです。連中は好きなだけ金が入ります」

「我々とは違ってな」

「借金もありませんし」

今度は借金の話も出た。

「そのことについてですが」

「催促でもあったが」

「はい。テンプル騎士団のものです」

「ここでこの騎士団の名前が出て来た。

「奴等か」

「はい」

顔を不機嫌なものにさせた王に対して答えた。

## 第二章

「借金の催促に。利子だけでもと」

「待つように言え」

やはり不機嫌な顔で指示を出す。

「今は無理だ」

「待つのなら利子がさらに増えると言っていますが」

「全く忌々しい」

その言葉を聞いて顔をさらに不機嫌なものにさせる。

「あれだけ儲けているのにまだ金が欲しいか」

「聖地の巡礼の保護や貿易だけではなく」

当時テンプル騎士団というこの組織は幅広く事業を展開していた。

「金融もやっていますから」

「騎士団なのにな」

あらためて不機嫌を口に出す王であった。

「何処まで汚く儲けるのか」

「しかもその態度が」

「余は何か」

まず家臣にそれを問うた。

「答えよ。余は何か」

「はっ、フランス王です」

「そうだ、フランス王だ」

そこを強調してみせる。

「その余に対してあそこまでの傲慢はとて」

「許せるものではありません」

「その通りだ。しかも」

ここで王の目がさらに光った。

「テンプル騎士団。その富はどう思つか」

「正直に申し上げて宜しいですか」

「うむ」

家臣にそれを許した。

「妬ましいものがあります。あれが我等のものならば」

「そうだな」

答えはここにあった。

「手に入れられればそれに越したことはない」

「その通りです」

家臣はまた答えた。

「それでは。王よ」

「そうだ」

笑みが変わった。酷薄かつ邪悪なものに。整った顔ながらそうしたよからぬものが実に似合う、この王はそうした顔を持つ王であった。

王は決めた。そのうえでまた家臣に告げた。

「これでフランスは救われる」

「では」

「ただしだ。余は貪欲ではない」

誰もそうは思っていないがあえて嘯いた。これは社交辞令のようなものだ。

「教皇様にもお話しておこう」

「教皇様にもですか」

「全ては神の為」

これは完全な嘘だ。

「そしてフランスの為」

これは半分真実だ。

「最後に余の為に」

これに関しては完全な真実だった。三つの言葉が今述べられたのだった。

「その三つだ」

「三つですか」

「その三つの為に為すべきことは決まった。異端を滅す」  
「異端を」

「異端を滅ぼすのは神の使徒の務めだ」

俗にこう言われてきてはいた。しかしこれは全てと言っていい程大義名分ではない。信仰を大義名分にしたのは十字軍がそうであった。またフランスでもアルビジョワ十字軍が異端である南フランスのカタリ派を攻撃し惨たらしく虐殺しその全てを奪っている。王はこれを言っているのだ。

「そうだな」

「その通りです。では」

「教皇様に使者を送れ」

「はっ」

王の言葉に対して一礼する。

「それではすぐに」

「頼むぞ」

こうして教皇のところに使者が送られた。この時代教皇は完全にフランス王の傀儡だった。これは他ならぬフィリップ四世がそうさせた。教皇を捕らえることによつてだ。

当時の教皇はクレメンス五世、フランス王の家臣と言ってもいい。その彼のところに王からの使者が来たのであった。

「陛下がか」

「はい」

家臣に等しい存在になつてしまつているのは今フランス王を陛下と呼んだところにはつきりと出ていた。彼もそれははつきりと自覚している。

「テンプル騎士団を討伐する許可を頂きたいとのことですよ」

「左様か」

「教皇様はどう思われますか」

「異端は許してはならない」

一言だった。

「そつだな」

「流石は教皇様」

「ここまで完全にただの儀礼である。もう答えは出ているのだ。」

「それでは。テンブル騎士団を我がフランス王国と共に」

「教皇庁としても彼等の異端については以前より調べておいた」

「以前よりですか」

「そつだ」

「これもまた芝居だ。儀礼という名の芝居だ。」

「悪魔を崇拜しているそつだ」

「何と」

異端が常に言われることだ。悪魔崇拜は。

「それについて調べる必要がある。さらにな」

「では。どうされますか」

「すぐに主立った者達を捕らえよ」

これもまたフランス王の意を汲んだ言葉だった。教皇は伊達に王の家臣とまで呼ばれているわけではないのだ。全てがわかってのことなのだ。

「よいな」

「はっ、それでは」

「すぐにかかる。いいな」

「わかりました。それでは」

こうして陰謀が本格化した。話はテンブル騎士団の者達が気付かないうちに闇の中で進められた。その結果。ある日騎士団の主立った者達が教皇も臨席するフランス王の宴に招かれたのだった。彼等は卓に並んで座っている。主の席には教皇と王が並んで座り共に見事な服を着ている。そこに王の家臣や枢機卿達が並んでおり向かい側に騎士団の者達が並んでいる。つまり王、教皇を挟んで互いに見合う形になっていた。

### 第三章

宴の場には鰻や肉、果物等が並びパンやワインも置かれている。彼等はそれを手で食べながら美酒に美食を楽しみ話に興じている。まずは他愛のない話であった。

「実はですな」

「うむ」

騎士団の一人が王達に話をしている。

「先日カイロに行った折ですが」

「何か面白いことがあったか」

「ええ。サラセンの者達ですが」

「ふむ」

サラセンとはアラビア人達のことだ。当時キリスト教徒達はムスリムである彼等をこう呼んでいた。つまりムスリムのことも言っているのだ。

「彼等は酒を飲みません」

「その様だな」

「ですがそれが違うのです」

「違うのか」

「はい。カイロで酒盛りをしているのを見ました」

このことを語るのである。

「あのタタールの者達が飲んでいる白い酒で」

「白い酒とな」

王も教皇もそれを聞いて眉を顰めさせる。彼等がはじめて聞く酒だったのだ。

「その様なものがあるのか」

「それはまた面妖な」

「いえ、これが本当なのです」

しかし彼は言う。

「馬の乳から作りまして」

「馬の乳からか」

「そうです。それを飲んでいました」

「さらにわかりませんな」

「全くだ」

王と教皇は顔を見合わせて言い合っている。

「そんな酒があるとは」

「しかも馬の乳を飲むとは」

「不思議だと思われますね」

「想像もできぬ」

これは王の言葉である。

「馬の乳を飲むのもそこから酒を作るのもサラセンが酒を飲むのもな」

「信じられませんか」

「うむ」

「私もだ」

教皇も王に続く。その相槌の打ち方から彼が完全に王の言いなりになっているのがわかる。騎士団の者達はそれを見て内心で侮蔑の笑みを浮かべていた。もつともそれは決して表には出さないが。それでも教皇を馬鹿にしているのは事実だった。それを見せないだけなのだ。

その彼等に対して。教皇は何気なくを装い続けて問う。

「そしてだ」

「はい」

「サラセンの者達のことだが」

「その彼等ですか」

「そうだ。偶像を崇拜しているそうだな」

「いえ、それは違います」

だが彼等はそれを否定した。

「違うのか」

「むしろ彼等はそれを否定しています」

正直にこのことを述べた。

「我等が崇拜するのはいいのですが彼等の中では」

「決してないのか」

「ただ。石を拝んでいます」

今話している彼は自分が知っていることをただありのままに述べているだけだ。ここには何の悪意もない。しかし聞いている方の悪意には全く気付いていなかった。

「石をか」

「左様です。メツカにある石を」

また述べる。

「拝んでいるのです。それも毎日」

「ふむ、そうだったのか」

「我等が聞いているのと全く違いますな」

「そうだな」

教皇は王の言葉に頷く。ここでも芝居だ。

「それにしてもだ」

「ええ、全く」

「サラセンの者達のこと実に詳しい」

最初に出た悪意だった。ただし隠された悪意だ。

「よくぞそこまで知っているな」

「やはり交易で出会いますから」

「むっ、出会つとな」

「そうです」

向こうの悪意には気付かずに頷く。頷くがそれでも今は何の悪意もない肯定だった。彼等は。

「交易をしていれば当然ながら」

「教皇様」

王はここで急に真剣な面持ちになった。その顔で教皇に問う。

「これは由々しき話ですな」

「そうだな。この交易とは」

「？それは当然では」

「左様です」

騎士団の者達は二人の話に何の疑いもなく言葉を返した。

「しかもこれは教皇のお許しがあつてすることです」

「ですから」

「確かに交易は許した」

教皇はそれは認めた。

「それはな」

「では何の問題もないではありませんか」

「違いますか？」

「交易は許したが出会いは許してはいない」

詭弁だった。バチカンがよく使うものだった。教皇は当時は宗教家というよりも政治家だった。信仰は方便に過ぎなかったのだ。ただ己の権勢と富の為に動いている者が多かった。バチカンの腐敗は恐ろしいまでのものでありそれは天下に知られていたがそれを恥とも思わなかったのだ。『恥を恥と思わなくなった時最も恐ろしい腐敗がはじまる』という言葉がある。その言葉通りの腐敗にあつたのが当時のバチカンなのだ。

「違うか」

「！？何を仰いますか」

「我等は節度を守つて」

「口では何とも言える」

己のことであるのは意識して見てはいない。

## 第四章

「その通りです、教皇様」

「フランス王もそう言われるか」

「はい」

敬虔なふりをして教皇の言葉に頷く。

「やはり噂にあった通りですな」

「全く以って」

「噂！？一体何の」

「何が何なのか我等には」

「惚けても無駄だ。全てはわかっているのだ」

しかし教皇は彼等の言葉を遮るようにして告げる。

「神の代理人である余の目は誤魔化せはせぬ」

「その通り。教皇様の御前にて虚言を並べ立てるとは許し難い」

「教皇様も陛下も」

「何を仰るのか」

やはり彼等にはわかっていないのだった。何もかも。向こう側の悪意に。

「我等は神に仕えるテンプル騎士団」

「嘘も偽りも」

「では聞こう。山羊を知っておるか」

「山羊！？」

「そうだ」

教皇は険しい顔を作って彼等に問うのだった。またしても。

「山羊を知っておろうな」

「無論です」

「山羊ならば」

彼等は何が何なのかわからないままそれに応える。

「山羊の乳を飲みますし」

「その肉も食しますが」

「それこそが何よりの証拠だ」

「何を証拠だと」

「山羊の乳も肉も誰もが食べるものでは」

「宴の場で食べるな」

また彼等に問うてきた。

「そつだな。嘘偽りのわきよつに述べよ」

「それは確かに」

「その通りです」

素直にそれを認める。宴の場において肉が出るのは普通である。

だから彼等もそれに頷くのだ。しかしであった。教皇はその彼等に對してまだ言うのだ。

「宴で山羊を食べるのが何よりの証拠」

「やはり間違いはありませんでしたな」

また教皇と王は言い合うのだった。

「異教徒共と付き合いその異端の教えに身を浸した」

「恐ろしい墮落と背徳の者達」

「我等が！？まさか」

「その様なことは」

彼等はまた何もわからないまま反論する。あまりにも話がわからず呆然とさえしている。

「ただ神の教えを守り」

「そつして生きていますが」

「嘘を申せ」

教皇はまた己の言葉を険しいものにさせた。

「その様なことはない」

「そつは申されましても」

「我等は」

「黙れ！」

王が彼等を一喝した。

「教皇の御前だぞ。控えよ」

「はっ、はい」

「これは失礼よ」

「やはりこれもまた異端の証拠ですな」

「全くです」

今の反論もまた強引にそう決められてしまった。最早何でも言い掛かりでありそれをダシに彼等を追い詰めていた。だが彼等は気が動転しそれに気付かないのだ。

「異教徒の教えに染まり背徳を極めた者達」

「そして教皇様の御前に平然と姿を現わすその破廉恥さ」

教皇と王は一方的に彼等を断罪する言葉を述べ続ける。

「その罪、許せぬ」

「兵達よ」

「ははっ」

何処からか兵士達が姿を現わしてきた。騎士団の者達はこれを見てこれまでのやり取りに察しをつけた。そのうえで王と教皇に対して叫んだ。

「はかったか！」

「まさかとは思ったが」

「何のことが」

だが王は白を切った。口の端を禍々しく歪めての笑みと共に。

「異端の者の言葉など聞くに値せぬ」

「フランス王の言われる通り」

「黙れ、王の傀儡が！」

「貴様には言われたくはない！」

「言ったな」

今の教皇への侮辱に応えたのは本人ではなかった。フランス王だった。彼はその禍々しい笑みをそのままにまた言う。騎士団の者達に対して。

「教皇様を罵倒するなど異端の証拠」

「やはり許してはおけぬ」

「許さぬとすれば何なのだ」

「言ってみよ」

「捕らえよ」

王が悪魔の顔で兵士達に指示を出した。

「そのまま連れて行け。よいな」

「はっ、それでは」

「その様に」

「おのれ、フィリップよ！」

「クレメンスよ！」

激昂した騎士団の者達は左右から掴まれ動けなくなりながらも彼等の名を叫ぶ。

「例え我等に何をしようとも！」

「我等は何も言わぬぞ！」

「そうか。ならば無理にでも言わせるまで」

地獄の底から出て来たような顔だった。陰惨な顔色になり悪魔の笑みはそのまま。目は赤く輝いている。王も教皇も同じ顔になっていた。

## 第五章

「容赦はするな。いいな」

「わかりました」

兵達は王の言葉に応えて騎士団の者達を連れて行く。王と教皇は叫び散らす彼等の後姿をこの上ない冷淡な目で見ていた。そのうえでお互いに言葉を交えさせるのだった。

「では陛下よ」

「何でしょうか」

「異端は何をしていたということにすればよいですか」

異端であることを作るということだった。これこそ謀略の何よりの証拠だった。

「そうですね。男色などはどうでしょうか」

「男色ですか」

キリスト教においてはこの上ない罪である。

「左様、異端である何よりの証ですから」

「そうですね。ではまずはそれで」

「宴の場で酒や美食と共に淫らな悦楽に耽っている」

バチカンで実際にあったことだ。教皇庁の中で。

「その際には娼婦達だけではなく騎士団の者達で互いに」

「それはいい。まさに異端ですな」

「あまつさえ異教徒と通じている」

先程の話の続きだった。

「この二つをまず」

「事実ということにしましょう」

「事実は作るものです」

王の言葉だった。

「時として。だからこそ」

「ここで作りましょう」

二人はこう言い合う。これがはじまりだった。王も教皇も騎士団の者達を次々に捕らえた。それから惨たらしい拷問にかけるのだ。た。

水を腹が膨れ上がるまで飲ませそこから無理矢理吐き出させる。全身に木槌で楔を打ち込む。針の椅子に座らせる。車で引き伸ばす、鎖で打ち据える。およそ考える限りの残虐な拷問が加えられていく。中にはその拷問のさ中に命を落とし軀を犬の餌にされる者もいた。だが誰も拷問には屈しなかった。

「知らん、我等はその様なことは知らん」

「異教徒と交わったこともない。宴も」

「嘘だ、何もかもが嘘だ」

こう言うだけだった。誰も王と教皇が『作り上げた』事実を認めようとしなかった。だがそれでも。王も教皇も平気な顔で新たな『事実』を作り上げていった。

「バフォメットだ」

「バフォメット」

「そうだ」

王は家臣に対して聞き慣れない名前を出した。

「騎士団の者達はこう呼んでいるのだ」

「それは一体何なのでしょうか」

「悪魔だ」

一言だった。

「黒い雄山羊の頭と足を持ち頭には蠟燭がある」

「そして」

「身体は女だ。乳房がある」

こうした悪魔を作ったのだった。全ては彼の想像による。

「蝙蝠の翼もあつたかな。そんなこともあの者達が言っていた」

「あの者達がですか」

「そうだ。わかったのだ」

ということにしたのだった。

「彼等はそこで悪魔を崇拜し神を冒瀆した」  
「何と、神を」

この家臣もわかつていた。彼も芝居をしているだけだ。

「恐ろしい。まさに異端です」

「御子を冒瀆しておられた」

キリストのことだ。言うまでもなくキリスト教での象徴だ。

「神ではなく嘘吐き預言者だとな」

「恐ろしい話です。聖地と聖堂を守護する騎士団の正体がそれだったとは」

聖地とはエルサレムのことだ。聖堂とはソロモン王の神殿のことだ。テンプル騎士団はここに本拠地を置いていた為に聖堂、即ちテンプル騎士団と呼ばれていたのである。

「許せぬ異端ですな」

「尋問をさらに強くせよ」

つまりさらに拷問をしるることだ。

「よいな。情けは無用ぞ」

「はっ、それでは」

「また事実が神から告げられるだろう」

事実をまた作るということだった。

「わかったな。では」

「このままさらに強くしていきます」

「吐かぬなら吐かぬでよい」

最初からそれは期待もしていなかった。自白させられなければ作る。簡単にそう考えていたのだ。王にしろ教皇にしろこれは同じだった。

「それでな。よいな」

「わかりました」

こうして拷問がさらに厳しいものとなった。蛇を満たした樽に入られ気が狂った者もいれば鼠達を腹の上に置かれそこに蓋をされそこから火を炊かれる。熱から逃げようとする鼠達に腹を食い破ら

れて苦痛の中に悶え死ぬ者もいた。だが彼等はそれでも決して『事実』を認めようとはしなかった。

「バフォメット。知るか！」

「その様な名前聞いたこともないわ」

天井から重石をつけて振り下ろされた騎士団の一人がそれに応える。隣で鉄の鞭で打たれている者も彼に続いて叫んでいた。

「我等は悪魔なぞ崇拜してはいない」

「だが。悪魔は知っている」

そのうえでこう主張するのだった。

「悪魔はフランスにいる！」

「教会にもだ！」

偽らざる彼等の心の言葉だった。

「フランス王と教皇、あの者達こそ」

「悪魔に他ならぬ！」

「戯言だ」

しかし王も教皇も彼等のその心の言葉を一笑に伏したのだった。信仰から来るものではなく嘲笑として。それを否定したのである。

「悪魔の戯言に過ぎぬ」

「異端の言い逃れよ」

そう言うだけだった。また誰もそれを否定しようとしなかった。

異端を擁護するならばそれだけで自分も異端とみなされるしまた騎士団自体も儲けていることで妬みを買っていたのも事実だからだ。

騎士団は誰も味方がいないままに次第に追い詰められさらに激しい責め苦を受けていた。

## 第六章

だがそれでも誰も自らが異端であることを認めない。そのうえ。彼等の財産の没収も思ったようには進まなかった。王はこのことに苛立ちを覚えていた。

「何故だ」

王は家臣に問うていた。

「何故財産があれだけしかないのだ」

「おそらくは隠しているものかと」

家臣はそう述べた。

「ですから見つからないのでしょうか」

「隠しているか」

「はい」

王の問いにも答える。

「そこにかんりのものが隠されていると思われれます」

「それは何処だ」

王は鋭い、獲物を狙う目で呟いた。

「何処にあるのかだが」

「わかりません。少なくともフランスにはありません」

「教皇庁は探し出しているだろうか」

「いえ、それが」

だが彼は王のその言葉には首を横に振るだけだった。

「イタリアはおるか神聖ローマ帝国内にもスペインにも」

「見当たらないというのか」

「イングランドにもスコットランドにもです」

「そちらも否定されたのだった。」

「あとは。めぼしい場所は」

「サラセンにでも隠したか」

「そちらにも人を送っています。ですが」

返答は明朗なものではなかった。それが何よりの証拠だった。

「どうにも」

「わかった。だが探し続けよ」

「わかりました」

「そしてだ。教皇様にお伝えせよ」

今度はバチカンを話に出してきた。

「最早テンプル騎士団の異端は確実なものになったとな」

「告白があったのですね」

「あった」

ということになるのだった。彼か教皇がこう言えばそれで決まるのだった。

「今までの取り調べのことは全て真実だったのだ」

「では。やはり」

「そうだ。彼等は異端だった」

最早決まっていたことをあえて述べてみせる。

「異端であることを自ら認めたと。悪魔に仕えていたのだ」

「あのバフォメットに」

「その罪、許せるものではない」

神妙だがそれでいて白々しさもある言葉だった。偽りである何よりの証拠だった。

「だがわしの裁くところではない。全ては」

「神の代理人である教皇様が」

「おそらく解散させられ全財産は没収だ」

だがこうも言うのだった。王は。

「異端を裁いたフランス王と教皇庁には神の恩恵が捧げられることになる」

「王に神の御加護だ」

「残念なことだ」

またしても神妙だが白々しい言葉が出された。

「聖地を守護する騎士団が異端だったとはな」

「全くです。嘆かわしい」

「全ては悪魔の企みによるもの」

その悪魔が何処にいるかは言わない。悪魔がどちらにいるのかさえも。だが今の王の顔はドス黒いもので満たされていた。これは真実だった。

「後は」

「裁きの炎があるだけですな」

「そういうことだ。では教皇様にお伝えせよ。よいな」

「はっ」

こうしてテンプル騎士団の処罰が決まった。彼等は解散させられその表にある財産は全て没収された。そのうえで主立った者達は火炙りに処せられることになった。

その処刑の日。長きに渡る凄惨な拷問によりその身体をボロ布の様にさせられた騎士団の者達が引き立てられてきた。腕や脚をなくしているものもいれば顔が原型を留めていない者も立てなくなり櫛に曳かれる者もいる。あまりにも無残な姿を晒しながら引き立てられてきた。

彼等は群衆に囲まれている。真実を知らない彼等は騎士団の者達を異端と信じ込み口々に罵声を浴び掛けていた。

「異端は死ね！」

「地獄に落ちろ！」

「フランス王万歳！」

「教皇様万歳！」

そしてフランス王と教皇を讃える。やはり何も知らないままに。

そこには王もいた。一際高い場所に座を設けそこに衛兵や家臣達に囲まれ見事な服を着て騎士団達を見下ろしていた。その顔は確かに王者のものではあった。

その彼が。騎士団の者達に対して言うのだった。

「異端の者達よ」

ここでは正義を守護する王の顔をしていた。

「その罪を己の死によって償うがいい」  
「戯言だ」

「そうだ、我等は異端ではない」  
彼等はまだそれを認めようとはしなかった。

「我等は陥れられたのだ」

「王と教皇、貴様等に」

そしてこう言うのだった。口が聞ける者は。口さえも完全に壊され話せなくなってしまった者もいたのだ。顔がほぼ壊れてしまっている者さえいた。

「陥れられたのだ」

「この恨み、忘れんぞ」

「異端が何を言うか！」

「陛下を愚弄するな！」

「神を否定するか！」

だが何も知らない群衆達は彼等のその言葉を否定した。そうして石を投げ彼等を攻める。王はその彼等に対して敵かに言うのだった。

「止めよ」

「何故ですか、王よ」

「異端に情けは」

「それは違う」

あくまで謹厳な王として振舞う。

「異端を裁くのは誰か」

「神です」

「そう、神だ」

自身の民衆に対して語る。王の仮面を被り。

「私ではない。ましてやそなた達でもない」

「ではどうすればよいのですか、我々は」

「彼等をどうすれば」

「見ているだけでよい」

謹厳な王としての仮面はまだ被っている。

「それだけでよいのだ。彼等が裁きの炎に裁かれるのをな」

「裁きの炎にですか」

「それでは」

「うむ、私と共に見守ろう」

さりげなく民衆を自分の手の中に収めてしまった。

「彼等が裁きを受けるその時をな」

「わかりました、それでは」

「是非。我々も陛下と共に」

「見るのだ」

またしても敵かな動作を芝居して己の民達に告げる。

「おぞましき異端の者達が裁きを受けるその姿をな」

「さあ異端よ焼き尽くされる！」

「神の裁きの炎でな！」

「神の裁きか」

それを聞いた騎士団の者のうちの一人が忌々しげに顔を歪めさせた。これまでの拷問で顔そのものが歪められていたがそれとはまた別の歪みを見せたのだ。

「それを受けるのは我等ではない」

「そうだ」

まだ口が聞ける騎士団の者がそれに応える。

「裁きを受けるのは我等を陥れた教皇と」

「王よ、貴様だ！」

皆同時にフランス王を見据えた。その憎悪に燃える目で。王はその全ての憎悪を受けたのだった。

「私は今ここに告げよう。今年のうちだ」

期日を区切ってきた。

「今年のうちには王と教皇を神の御前に呼ぶ」

「そこには我等がいる。そして」

騎士団の者達は口々に言う。

「御前達を地獄に落としてやる」

## バフォメット

「そのバフォメットがいる地獄にな！」

「だ、黙れ！」

王はその憎悪を受け怯んだ。しかしその怯みは何とか己の民衆達にも周りにいる家臣達にも見せず芝居の仮面を被り続けた。そのうえで声も何とか平静を保ちながら火刑台のところにいる兵士達に指示を出したのだった。

## 第七章

「我が愛する兵達よ！」

「はっ、陛下」

「その忌まわしい異端の者達を火刑の柱に縛り付けるのだ」

「わかりました」

兵達は王のその言葉に頷く。そうしてすぐに騎士団の者達を柱のところ连接到り行き縛り付けた。王は次には薪をくべさせ火を点けるように指示を出した。

「さあ燃える！」

「焼け死ね！」

松明を持った男達が出て来て民衆の興奮はさらに高まった。

「異端は神の炎に焼き尽くされる！」

「そのまま地獄に落ちろ！」

「地獄に落ちるのは我等ではない！」

「そうだ！」

しかしそれでも騎士団の者達は叫ぶのだった。死の炎を前にしても。

「いいか、言ったぞ！」

「今年のうちだ！」

また王に対して憎悪の目を向けての言葉だった。

「王よ、貴様は地獄に落ちろ！」

「教皇と仲良くな！」

「黙らせよ！」

王はたまりかねて予定にはない指示を出した。

「何でもよい。もう喋らせるな」

「は、はい」

「わかりました」

家臣達も兵達も慌ててそれに応える。猿轡をかけてもう喋らせな

いようにした。そのうえで火を点けたのだった。

バチバチと木が燃える音と火の粉、それに煙が沸き起こる。騎士団の者達は忽ちのうちに炎に包まれ生きながら焼かれていく。群衆の嘲りと罵倒が続くが彼等はそれを聞いてはいなかった。ただ王を憎悪の目で睨み据えているだけだった。王はそれを強張った顔で受け続け彼等の死を見届けるのだった。

火が消えて騎士団の者達は黒焦げた骸となった。家臣の一人が誰もかそうなったところで王に対して問うてきた。

「終わりましたが」

「どうするかだな」

「はい、骸はどうされますか？」

「捨てて置け」

忌々しげに一言告げた。

「捨てますか」

「そうだ、いつも通りな」

「では異端の屍として晒し後は」

「烏の餌にでも何でもせよ」

異端に限らず処刑されたならば城門にその骸を晒され野犬や烏の喰らうままに任せる。それがこの時代のしきたりであった。

「よいな」

「わかりました。では」

「これで終わった」

自分自身に言い聞かせる言葉だった。

「全てな」

「はい」

確かに騎士団達への処刑は終わった。だが騎士団の財産は思ったよりも集まらなかった。そして、騎士団の主立った者達が処刑されてから王と教皇に異変が起こったのだ。

「また来たか」

宴の時に不意に呟きだすのだ。

「来るなど言っておろう。異端が」

「異端!？」

「何のことだ」

宴の場である。異端なぞいる筈がない。周りにいる家臣達は王のその言葉に不審なものを感じずにはいられなかった。いぶかしむ彼等の前で王はさらに呟くのだった。

「御前達は死んだ。その証拠に黒焦げではないか」

「何か見えるか？」

「いや」

やはりいぶかしむ顔で言い合う。彼等には見えはしない。

「何も見えないが」

「陛下は一体何を御覧になられているのだ」

「そうか、去らぬか」

王は剣呑な顔になり息を荒くさせた。そして。

「ならばわしがこの手で」

「な、どうされたのだ」

「陛下、御気を確かに」

不意に腰にある剣に手をかけそれを引き抜いたのだ。それを滅茶苦茶に縦横に振り回す。宴の場は大混乱になり誰もが王から逃げ惑う。王は昼も夜もうなされ何かに怯えていた。そしてことあることに剣を抜き空を切り回す。そしてそれは教皇も同じだった。

「悪魔よ、去れ!」

あらぬところを見て叫ぶのだった。

「余は神の代理人ぞ!悪魔なぞ恐れはせぬ!」

「悪魔ですと?」

「教皇様、ここはローマです」

言うまでもなく教皇庁がある教皇の街だ。この世で最も聖なる場所とされている街である。

「悪魔なぞは入られる筈が」

「そうです。お戯れを」

「そなた達には見えてはおらんのか」

だが教皇は彼等のその言葉を否定する。

「何がでしょうか」

「あれだ」

空を指差す。そこには何も無い。だが教皇は言うのだ。

「あそこにいるのだ。山羊が」

「山羊が」

「雄山羊の頭に。何とおぞましい」

指を震わせながら言葉を続ける。

「女の乳房がある。そして忌まわしい蝙蝠の翼までがある」

「馬鹿な、そのようなものが」

「いる筈が」

「黙れ！」

恐怖に満ちた声で叫んだ。

「いるのだ。わしがいると言えはいる！」

「教皇様、お静かに」

「いますが。だが」

「そうだ、いるのだ」

教皇の言葉は真実だ。だからそれは認めた。見えはしなくとも。

教皇はさらに言葉を続けるのだった。

「あそこにな。悪魔が」

「一体どうされたのだ」

「そんなものは」

「馬鹿な、何故見えぬ」

教皇にとっては信じられぬことだった。あくまで彼は。

## 第八章

「あそこにいる悪魔が。どうしてだ」

「そしてその悪魔は」

「何をしているのでしょうか」

周りの者達はたまりかねて彼に問うた。あまりにも教皇がいると主張するから。

「言っておるのだ、わしに」

「何と」

「こつちへ来い、こつちへ来いとな」

「こつちへですか」

「神の代理人である私を地獄へ引き込むとな。そんなことがあつてたまるものか」

「教皇様」

彼のあまりもの狼狽に誰もが困惑していたが緋色の法衣の者が彼に言ってきた。枢機卿だ。教会においては教皇に次ぐ地位と栄誉を手に入れている者だ。

「まずはお休みになられて下さい」

「休むのか」

「そうです」

こつ彼に告げる。

「今は。宜しいでしょうか」

「そうだな。悪魔はまだ見ているが」

枢機卿の言葉を受けることにした。とりあえずは。

「ではそうしよう。後は頼むぞ」

「はい、お任せ下さい」

こつして教皇は共の者達に連れられてその場を後にする。後には枢機卿達が残るが彼等の困惑した顔はそのままであった。

「何がどうなつたのだ」

「悪魔だと」

顔を見合わせて言い合う。

「その様なものは見えない」

「何処にも」

彼等には見えていなかった。何も。だから顔を見合わせて言い合っているのだ。しかしここで。その枢機卿が彼等に対して告げたのだった。

「いや、心当たりがある」

「何と枢機卿様」

「それは一体」

「雄山羊の頭を持っているのだな」

彼がまず問うたのはそこであった。

「そして女の乳房を持っている。そうだな」

「はい、教皇様の御言葉ですと」

「その通りです」

そこにいる者達は口々に彼の問いに答えるのだった。

「ですがその様な悪魔は」

「聞いたことはありません」

「テンプル騎士団の悪魔だ」

だが枢機卿は言った。その悪魔が何者なのかを。

「それだ」

「テンプル騎士団」

「あの異端の」

「そうだ。バフォメットだ」

枢機卿はその悪魔の名を知っていた。これは彼が教皇の側に仕えているからだ。教皇が作り上げた悪魔だということも知っているのだ。

「それがその悪魔の名だ」

「バフォメットですか」

「それがその悪魔」

「しかし。何故だ」

悪魔のことはわかった。だが枢機卿はそれでもわからないことがあった。それを呟かすにはいられなかった。

「何故あの悪魔が出て来たのだ。教皇様の作られた悪魔に過ぎぬに」

「のろいでしょうか」

誰かが言った。

「呪いか」

「はい、テンプル騎士団の」

神父の一人がこう言うのだった。

「我等が陥れ殺していった彼等の」

「彼等の呪いか」

「違うでしょうか。そう考えれば有り得ますが」

「うつむ」

枢機卿はそれを聞いて考える顔になった。真剣なものだった。

「確かにな。それは」

「考えられます」

神父はそれをまた言う。

「だとすればフランス王も」

「そういえば」

別の神父がここで口を開いた。

「何かあったのか」

「フランス王もまた近頃常に何かに怯え剣を振り回しているそうです」

「フランス王もか」

「やはり。何かあるのでしょうか」

「騎士団の呪いが」

彼等が考えるのはやはりそれであった。

「覆っているのでしょうか」

「このバチカンをも」

「わからぬ。だが」

枢機卿は周りの者達に対して言う。その頭を必死に振って何かを否定しながら。

「恐ろしいことがまた起ころうとしているのは確かだ」

「はい」

他の者達もそれは感じていた。それから暫くして。まずはフランス王に異変が起こった。彼は昼も夜も休むことができなくなり遂に床の上でうなされる日々を過ごすようになっていた。

その床の上で。彼は周りに控える者達に「わごとこの様にこう繰り返していったのだった。」

「呪いだ、呪いだ」

「呪い!?!」

「そうだ」

その整った顔は憔悴しきって痩せこけ髪も髭もかなり抜け落ちていた。その無残な有様で痩せこけてしまった身体を横たえ。そこで呻いていたのだ。

「呪いだ、騎士団達の呪いだ」

「騎士団達の」

「そうだ、その呪いにより余は死ぬ」

彼は言った。

「地獄だ、地獄が見える」

「地獄がですか」

「三人の裁判官達がいる。そして」

三人の裁判官はダンテの神曲に出る彼等であろうか。ラダマンテイス、アイアコス、ミーノス。ゼウスの息子でありかつては王者であつた者達だ。彼はそれを見ているのだろうか。

「騎士団の者達が。ぞっとする笑みで」

「いるのですか」

「血に塗れた顔で。拷問をそのままにして」

「何と」

「何と恐ろしい」

誰もがそれを聞いて驚きを隠せない。

「あの騎士団の者達が」

「地獄に」

「余は。今からそこに行くのか」

既に目は空虚を見ている。生者の目ではなくなっていた。

「呪いにより、罪により」

「陛下っ」

「御気を確かに」

「駄目だ。呪いからは逃げることはできぬ」

王の言葉は今にも消え入りそうなものだった。

「これで。余は。地獄へ」

「陛下、陛下！」

「な、何という御顔だ」

家臣達は王の最期の顔を見て凍りついた。それは恐怖にひきつり叫び声をあげるような顔だった。フランス王はその顔で事切れてしまったのだ。

また教皇もそれは同じだった。彼もまた衰弱しきり恐ろしい顔で亡くなった。この時に彼が叫んだ言葉もまた実に恐ろしいものだった。

「バフォメット……今私を地獄へ連れて行くのか！」

不意にベッドの上から起き上がりこう叫びそのまま倒れ込んで死んでしまった。やはりその顔は恐怖により歪み目が大きく飛び出た恐ろしいものだった。こうしてテンプル騎士団を滅ぼした二人は怪死してしまった。

テンプル騎士団が陥れたこともバフォメットという悪魔が王と教皇の創作であることもわかつている。しかしそれ以上にわからないことがある。

そのバフォメットという悪魔はそれから姿を現わしたのだ。魔女達のサバトにおいてその姿は常にあり彼女達を悪の道へと誘って

いる。彼は本当に創作だったのか、それともそれが実際に悪魔として生を受けたのかどうかはわからない。だがこれだけは言えるであろう。悪意というものと時として実体になる。その実体を受けたのが今もサバトに姿を現わすバフォメットであるとしたら。それは奇怪では済まされない話だ。人が悪魔を生み出し、そしてそれを世に送り出すということなのだから。

バフォメット 完

2008・4・28

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1937e/>

---

バフォメット

2009年3月24日09時34分発行